

【書評】

カトリーヌ・マラブー『泥棒！：アナキズムと哲学』伊藤潤一郎・吉松寛・横田祐美子訳、青土社、2024年。

本書は、哲学者たちが「アナーキー」という語を政治的アナキズムから奪いとりつつ、アナキズム対してつねに批判の矛先を向け、その可能性を抑圧してきたことへの告発の書である。マラブーによれば、シュールマン、レヴィナス、デリダ、フーコー、アガンベン、ランシエールらフランス現代哲学を牽引してきた思想家たち——また思想家たちに依拠するポスト・アナキストたち——は、いずれも各々の鍵語として「アナーキー」を論じる一方で、つねに伝統的アナキズムを批判しつつしてきた。かの思想家たちは「統治という先入見」にとらわれており、命令と服従からなる統治の論理抜きに政治を語ることができないと考える。つまりアナキズムのいう統治なき「自主管理や自己組織化など真摯に考えるべき政治的可能性ではない」とみなしていたのである。著者はこの点を糾弾する。

他方、意外にも本書は、かの思想家たちの政治思想へのよき入門書でもある。マラブーは各々の（アルケーを優位におき支配の根拠とする）アルケー・パラダイムの批判またはその脱構築について、綿密に検討したうえで端的に要約している。彼らの実践的な可能性について横断的に考える者にとっては、必読の書であるといえよう。

以下に、それぞれの「アナーキー」についての思考と、マラブーの批判とを粗雑に要約しておこう。

シュールマン

シュールマンはアリストテレスのアルケー概念を検討することで、それが内在化・隠蔽するアナーキーを剔出しようとする。アリストテレスは「はじまり」と「支配」とを同一の概念とみなすことで、後続のものより優位性をもつ先行するもの、また傾向性を与える実体としてアルケーを概念化する。したがってアルケーは「目的＝おわり」と直接的に結びつくものとなり、そこへと向かうことを要請する。ハイデガーはここから、目的へと向かって行為することにおける実践・制作・技術の三つの領域の紐帯への考察が、理論的な「目的論的政治」を生んだことを示した。しかしアリストテレスのようなアルケー・パラダイムは、アルケー自体の（無）起源がもつ原理外的な要素、アナーキーな要素を隠匿することによって成立している（このことをシュールマンは「盗み」と表現している）。こうした議論をみれば、シュールマンはアナーキーの思想家である。

ところが、シュールマンはアナキズムを自称することはない。そればかりか彼は、アナキズムという自称は、それ自身が原理となることでアルケーへと準拠しつつアナーキーを抑圧していると主張する。マラブーによれば「アナキストと名乗ることの不可能性」は「アナキズムと矛盾するものではない」がゆえに、シュールマンのこの主張には不満が残る。

レヴィナス

レヴィナスは著作のなかで「アナーキー」という語を鍵語として用いるが、アナキズムを正面から論じることを拒んでいる。マラブーはその理由を、性急に「イスラエル国の擁護」や「ある種のシオニズム」に探すのではなく、別の内在的な論点に探そうとする。

レヴィナスにおいてアルケー・パラダイムの失効は「他人」への暴露によってもたらされうる。それは「倫理」の名のもとで語られる、絶対的外部からの命令に対する責任、命令の聴取＝了解に先立つ服従のアナーキーである。ところがマラブーのみるところ、アナーキーの思想家であるレヴィナスは、政治的アナキズムと二段階において相反している。

第一段階とは、レヴィナスにおける「国家の必要性」の主張である。彼はホッブズの「リヴァイアサン」あるいは「カエサル国家」へのアンチテーゼとして、他人への責任に始まる「ダヴィデの国家」を論じる。それは国家のなかで国家を超える国家、「統治する政府の不在を約束する国家」であり、アナーキーを救う国家である。

そして第二段階は、レヴィナスが「奴隷が歴史において被ってきた受難を倫理的トラウマから排除し、隷従の真の他律を排斥し、当の他律から意味を取り除く奴隷性概念を構築した」ことにある。彼のいう隷従は、哲学的または倫理のカテゴリーとして、他人からの命令を差し向けるために選ばれたものの「選び」と同様に語られるが、それはマラブーによれば、歴史的な奴隷たちとその苦しみとを排除することによる平板化にほかならない。

こうした二段階をアナキズム的にとらえ直すことがなければ、レヴィナスのいう倫理は国家を前提としたものでありつづけ、うまく統治されすぎてしまう、とマラブーは結論づける。

デリダ

デリダは脱構築によって、言説の依って立つ隠蔽されたアルケーを俎上に載せることで、それらのアナーキーを論じてきた。しかし脱構築がアナキズムであるかどうか、という問いに対してデリダは「イエスでありノー」という答えしか与えていないように思われる。彼は『法の力』において、ベンヤミンがゼネストへ設ける区別を取りあげる。それは「国家秩序のとりかえ」（政治的ストライキ、改良主義）と「国家の廃止」（プロレタリア的ゼネスト、アナキズム）との区別である。デリダによれば、脱構築はこの二者間のどちらの可能性をも有している。脱構築が可能なのは後者のもたらす「断絶」によってであるが、後者として純粋なものではなく、前者の政治的なものから逃れられないからである。マラブーはさらに一步進んで、そうした読解の奥に、デリダの「ノー」への傾向をみようとする。とりわけフロイトの「死の欲動」、レヴィ＝ストロースの「エクリチュール批判」、レヴィナスの「他者性」の読解において、デリダのアナキズムに対する否定的な態度をみる。

一方、晩年のデリダはアナキズムへと近接するようにもみえる。『9月11日の「概念」』のなかで、彼は民主主義の改善可能性に賭けようとする挙措をみせている。それによれば、9・11テロにみられる自然のアナーキーに対置しうるのは、恐怖を眼差す思考の彼岸としての、救済の到

来に開かれたメシア的なアナキズムであり、「来るべき民主主義」である。ところがマラブーによれば、こうした举措にもかかわらず、デリダはなお「議院内閣制と国家」を堅持しようとしている。

フーコー

フーコーの戦略は、まずアルケー・パラダイムを副次的なものとすることにある。つまり、政治の起源を「権力なき抵抗」にみることで政治のアルケーをアナーキーに返し、この抵抗の多様な変形可能性を考えることにある。マラブーのみるところ、とりわけ最後のセミナー『真理の勇気』のフーコーは、制度としての統治の必然性を放棄しており、アナキズムへと接近している。

フーコーはかつて「主体化＝従属」の両義性（主権への服従／抵抗の主体化）を論じたが、それはなお主体化する主体への服従にとどまっていた。その後、真理を語ること、率直に話すこととしての「パレーシア」を導入することで、フーコーは命令／服従ではない「自己の統治」を論じることになる。ただし、自己の統治もまたそれ自体、命令／服従を自己内在化させているにすぎないとみることもできよう。マラブーのみるところ、むしろパレーシア論の出自であるキュニコス派（ディオゲネス）への接近こそがフーコーのアナキズムである。それはたんに突飛な言動にあるのではなく、自己触発と断絶しうる生によって、生き方を根本的に変容させる戦闘性、鏡の中に犬をみるような「統治されざるもの」である。

アガンベン

アガンベンがフーコー思想を内在化させつつも統治の論理と決別し、「瀆神」をみずからの哲学的企図に据える。瀆神の対象となる「聖なるもの」とは、特定の宗教性にとどまるものではなく、むしろ法-政治一般がもたらす基準外の存在の定立、つまり「例外化」によって生じるものを指す。この聖なるものと法-政治との循環関係を明らかにすることが瀆神であり、聖なるものをたんに貶める——それによって聖なるものをかえって例外化する——こととしての「侵犯」ではない。

アガンベンがアリストテレスが近づけたアルケーの「はじまり」と「命令」（支配）の二義が、それぞれ事実確認的／行為遂行的なものとして根本的に異なると指摘することで、シュールマンと同様、アルケーのなかにあるアナーキーを見いだそうとする。アガンベンがそれをキリスト教神学はおろか、神そのものにも見いだそうとする。彼によれば、神のなかには「はじまり」と「命令」の分裂としてのアナーキーが存し、賛美や儀礼などはその祝福にすぎない。この神のアナーキーを明らかにすることで神の不活性化、瀆神が実行される。

しかしアガンベンにおいて、アナーキーそのものはいかにして可能かという問いに答えるのは難しい。言い換えればそれは「侵犯なきアナーキー」の可能性の問いである。彼はこれに答えるかたちで「ゾーン」なる概念を呈示しようとするが、マラブーによれば、この概念自体もアルケーとしてのシニフィアン化を免れていない。

ランシエール

ランシエールもまた、アナーキーの思想家だがアナキストを自称しない。ランシエールは、伝統的なアナキズムがマルクス主義とともに、政治を経済の批判、つまり生産・交換関係の問い直しに立脚させることで、破綻の途をたどったと批判する。新たな政治のために必要なのは、国制ではない民主主義、「権力の正当性に対する自己否定」によって定義される民主主義のラディカルさである。

ランシエールがアナキストかどうかを問うために論じられるべきは、この民主主義のアナーキーがいかんして現れるかである。彼によれば、アナーキーは「ポリス」において現れる。ポリスとは「権力の組織化、地位と役割の分配、この分配を正当化するシステム」であり、あらゆる社会に不可避なものだが、かならずしも悪しきものではない。民主主義のために重要なのは、このポリスにアナーキー（としての政治）がポリスをかき乱すものとして時折、現れることである。このアナーキーは原理を欠いているがゆえに固有の領域と場をもたず、ポリスにかかわって定着することはできないが、「美学」において現前する契機をもつ。言葉を換えれば、アナーキーの現前は政治の分配における不可避の「計算違い」であり、それへと対処することで別のポリスへと配置転換する動力となる。

マラブーはこうしてランシエール思想におけるアナーキーをみてとるが、同時にそこへ欠けている他者性をも指摘する。つまり、ランシエールはポリスの不可避性を論じるがゆえに、「証言」「呈示不可能なもの」「非対称性」「他性の問い」をポリスに内在させることで思考しえなくしているという。

マラブーは以上のように思想家たちの「アナーキー」を取り出すことで、彼らがアナキズムへとつきつける否認が何を意味するかについて問うている。それは、膨大なリファレンスを伴う複合的なテキストの網の目から、隠されたアナキズム／非アナキズムの錯綜をほどこす緻密な作業である。この作業に丁寧に寄り添って練り上げられた本書の翻訳は、原文の内容を専門外の読者にもアクセス可能なものとすることに成功している。

ただし本書の読者は、マラブーが呈示する「統治されざるもの」「自主管理」「自己組織化」「アナキズム的秩序」がいかなるものかという問いと、みずから向き合わなければならない。マラブーがおそらくは積極的な価値を与えている、政治の亀裂、切断、蜂起は、いかんして実現し、また定着しうるのか。結論部で言及されるような、アナキストが国制を内側から変容させるような政治は、国制とはいかなる意味で別のものなのか。訳者あとがきで述べられるように、そうした疑問はマラブーの他の著作へと延長されるべきであろう。今後の展開に注目したい。

（松葉 類）